

## 物語のおや

## 竹取物語と伊勢物語より

物語の祖と呼ばれているものに「竹取物語」と「伊勢物語」があります。

竹取物語は、皆さんも知っているあのかぐや姫のお話です。

「いまは昔、竹取の翁おきなというもの有りけり。野山にまじりて竹を取りつみやくこ、よろづの事に使いけり。名をばさかきの造みやうことなむいひける。一ひとすぢで始まり、「もと光る竹なむ一筋」をみつけ、「怪あやしがりて近づけば三寸ばかりなる人いとうつくしうてゐた」のがかぐや姫です。三月ほどして成人に達したかぐや姫はその美しさから五人の貴公子が求婚しますが、どれも受け付けません、御門までもかぐや姫を得ようと狂奔するのですが、ついにすべて失敗。やがて、満月の中、月にかぐや姫は帰っていつてしまうのです。月の人という運命に逆らえない女性としてかぐや姫は描かれているのか、人間の力のおぼつかなさを描いたのか私のはわかりません。

このお話の特徴に「いまは昔」という冒頭句があります。これは、古くからの物語や説話の冒頭

に使われていて、「平中物語」「大和物語」「落窪物語」「宇治拾遺物語」等の冒頭も同じ言葉で始まっています。

これを文末の「けり」と関連して「この話の時は昔なのであるが」という解釈するのが適当であろうとする人がいます。要するに「むかし、むかし」という昔話と同じなのです。かぐや姫の竹取物語も五人の貴公子が探しにでる「仏の御石の鉢」やら「蓬萊の玉の枝」やら「火鼠の皮衣」やら「龍の頸の玉」やらは、それぞれが、また「昔のお話」の中にでてくるもので、それらがさらに組み立てられているという点で優れた昔話だったといえるのです。

私の学生時代、この「いまは昔」を具体的に何年前のことか証明せよと先生から課題を出され、考えたことがあります。この先生は、約一〇年間だと論文を書き上げていました。「それは、一〇年前」ということですが、「一〇年前の話だか」なんて言われるより、やはり「昔、昔」の方がいいですよ。

「伊勢物語」は、「むかし」で始まり「むかし、を」とこありけり」が代表的な冒頭句になっています。この場合の「むかし」は「竹取物語」の「いまは昔」と同義です。

むかし、をとこ、うひかうぶりして、平城（なら）の京（みやこ）、春日の里に知るよしして、狩り往にけり。」で始まります。その春日の里にとても美しい女姉妹が住んでいたのです。このをとこの狩りの出で立ちは、しのぶず

りの狩衣。彼は、自分の狩衣の一部を切り取って、歌（和歌）を書いてこの女性兄弟に贈ります。

かすが野の若紫のすり衣しのぶのみだれ限り知られず

なんときぎな振る舞いでしょうか。このようなをとこの行状や心情が歌とともにつづられているのが「伊勢物語」です。

伊勢物語の中で私が好きなのが九段です。

むかし、をとこありけり。そのをとこ身えうなきものに思ひなして、京にはあらじ、あづまの方に住むべき國くに求めにとて行きけり。

以下を後世の人は「東下り」と言いました。なぜ、東下りなのか。都を中心にして都から離れていくことを下ると言ったのですが、都ではない現在の東京へは都から下ることになります。だから、江戸に將軍様がいたとしても京都や大阪を上方と言うのです。

なほ行き行きて、武蔵の国と下つ總の中に、いと大きな河あり。それをすみだ河といふ。現在の隅田川であり、江戸時代の大かわです。その河に都では見られない白い鳥で足と嘴が赤く、鴨の大ききの水鳥を認めます。それで、渡守に尋ねます。「これなむ都鳥」渡守の返答でした。「都鳥」という名に一挙に望郷の感が極まります。

名にし負うおはばいざこととはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと。

舟中、涙にあふれます。